

編集デスク <12>

「看護教育」が創刊満一年を迎えた。乳幼児でも、お誕生を迎えれば、離乳はおろか、歯も生えはじめ、立って歩き始めるであろう。私たちの「看護教育」は、その点どうであろうか？

発育は、きわめて順調なようである。優良健康児である。これは、自画自讃ではない。この頃はドライだから、私たち編集者はお世辞ばかり聞いてくるわけではない。たまにはお叱りや、忠告や非難も耳に入る。ところが、この雑誌については、入ってくるのは、どうも讃辞が多いようである。お世辞ばかり聞いて来てはいけなと、私は皆に注意しているのだが、耳に入るのは優良健康児の頌歌の方が圧倒的に多いのである。

編集者として、これは喜んでよいことであろう。そして、その喜びと刺激とを、更に向上のためのスプリング・ボードにしたい。今日の看護教育界は、正直に言って、曲り角に來ている。指導理念についても、新しい指導者の要請される点についても、正に曲り角にさしかかっている

とはいけない。一年目には評価されたことが、二年目には、すでに土台である。二年目は、その土台に立っての飛躍がなければならない。日進月歩の看護教育界にあっては、それが現実である。

看護教育の實際にたずさわる者は、ナースとしての人間的教養の持ち主でなければならない。そして、その上に技術のリーダーでなければならない。ナースに要求される対人関係が、そのような全人間的成長を前提とした職業知識を必要とするのである。「看護教育」は、それにこたえる雑誌である。ナースの三人が集まるところ、リーダーシップが要請される。リーダーシップの要請されるところに、この雑誌がある。創刊二年目を迎える編集者の決意は、そのことにつながっている。

(本社編集長)

誕生一周年

長谷川 泉

よい指針が欲しい。信頼できるリーダーが欲しい。新しい看護教育界の道標となる座右の書が欲しい。この要望は、全国的に根強いものがある。津々浦々のいつわらざる声である。「看護教育」は、この声にこたえるのである。

一年目は、これでよかった。しかし、二年目からは一年目のようなこ

持のこじれみたいな職場の問題とか、そんなことは何回か聞かれたことがあります。

高橋 結核の病棟は入院している患者さんによって雰囲気違ってきますね。少し性格的に問題のある人。

乾 結局病棟の空気が問題なんでしょうね。

高橋 新しい学生が次々に実習に行くでしょう。だから患者にとってみれば長い間入院している。学生が、どういう人がくるだろうかという見方で学生をみる人が多いようですね。

乾 結局外科病棟が一番楽で、明かるくて。

高橋 一般外科ならば、何週間たって手術したら帰れるという目標がたっておりますからね。

<他の学科との関連性をどう処理するか>

高橋 先生の学科では、社会学との関連性と、精神衛生の関連性と、それから生理との関連性はどうでしょうか。

乾 無論なことはいわけですけれども、心理学的な事実と、生理的な基礎というもののまではがっちり教えるところまで行けないのじゃないか。事実これは学問も若いし、それこそ生理の先生と共同研究でやらないと。

高橋 それから小児科との関連性はどうでしょうか。

乾 多少ありますね。小児科の先生あたりは、近ごろ心理学や精神衛生を勉強していっしょやる。

本誌 そうすると学院で心理学を教えておられる、社

会学、精神衛生、あるいは小児科というような、本当の理想をいえばそういうことを教える先生方が、心理学の1年間のカリキュラムならばカリキュラムを話合うということが必要なわけですか。

乾 理想をいえばね。

高橋 もしそれがそこまで、たった1回の会合ではあるいは行けないかもしれませんが、あったほうがいい。

本誌 そういう橋渡しを教務の先生がすべきだということになるのですね。

高橋 いわゆる看護実践の中におきましては、心理学というところにはまでは、現在の段階ではやれる人が非常に少ないのじゃないでしょうか。こんないい方は、非常に失礼ないい方かもしれませんが。また臨床心理、看護心理は今後の研究課程として、臨床の看護婦と看護婦学校教師と専門の先生におはいいいただき深く掘り下げて行くことが必要でしょう。

本誌 すらっといって実践の場合は各科の看護婦さんたちはいろいろ院内でそういうものを勉強して行くという形ですか。

乾 あれは少しはやっているらしいじゃないですか。病院の看護婦さんたちの研究会。

高橋 今看護研究会というのはあります。

乾 そういうものがずい分、もう少しゆとりをもってやれるような条件で——ゆとりというのは経済的なゆと